

色彩学

BULLETIN OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN

VOLUME 2 NUMBER 2 2023



巻頭言 いろくばり

第54回全国大会実行委員長 栗野 由美 (東京造形大学)

日本色彩学会第54回全国大会を、2023年6月24日(土)、25日(日)に東京造形大学にて、ハイブリッドで開催いたします。今大会のテーマは「いろくばり」です。対面開催が可能となった今回も豊かな機会とすべく、大会実行委員、ご協力者とともに準備をすすめております。これからしほの誌面にて、「いろくばり」という言葉を辿る旅におつきあいください。

人間の視覚は刺激の差異を検出する仕組みによって光を特定の彩りへと情報化する機能をもち、その認知過程において「色」は常に複数で存在します。古来より色を複数に分ける境界を、思想家、理論家や実務家が様々な論述、表現をもって示してきました。また、「色」は視覚情報だけでなく、仕草や気配、ものごとのありようを語る文脈におかれる言葉とも認識されます。「くばる」という言葉は、届ける、行き渡らせるという意味があり、古くは嫁がせて縁をもつという意味にも使われました。間隔を置く、間を空ける、という場合にも使われるため、目に見えるもの、触れられるものの在/不在より、くばる意志と受け取る意志の疎通を認める言葉のように思われます。

来し方3年の間には、COVID-19と名付けられた感染症の世界的蔓延、目に見える暴力による命や日常生活の人為的な破壊行為、現代科学をもってしても防御不能な自然の猛威など、悲観的な天地驚愕が、個々人の認識のうえで改めて顕在化したことと思います。信念のありようが正義の破滅的な衝突に至る惨状に動揺する一方で、意思と自制が千の針穴を通すひとすじの光となるさまに詠嘆する経験もあったかと思えます。それらは無知により潜在していた事象への気づきを促す経験ともなったことでしょう。わたしたちが生きている世界は絶え間ない力の衝突や融合に

より変化し続けるもので、そのような時間のありようを感覚するのが「生きる」ということことわりの理です。混沌を調和へと整えようと欲するはたらしが思考であり、思考は洞察により推進され、その精緻さは知識の豊穡を源泉とします。こんにちでは、古代から様々な見立てが示されてきた「人間とは何か」という問いをめぐり、「人間」を形成する、目に見える形状、目に見えない仕組み、および知能の働きに関して、科学はその representation にまで及ぼんとしています。このことに思いを馳せる時、かつて欧州を中心に自然科学が変革的進歩を遂げた17世紀から18世紀にわたる意識の変化に戸惑いを隠さなかった人々の吐露や挑戦、その象徴とされたNewtonの『OPTICS』に向けられた“Unweave a rainbow”という畏れ、そしてその畏れを包容する“Sense of wonder”という意思への眼差しを自らに問います。そうした思索の果てに、「いろをくばる」ことが現生人類の由縁であるように思い至ります。色彩の森羅万象に臨む研究者への敬意を込めて、この言葉を大会テーマとしました。

全国大会会場では研究発表、研究会による企画展示、企業展示に加えて久々に対面での懇親会も開催します。また、会場隣接の附属美術館では「いろどころ～科学と美学がであう色彩学のありか」展が開催されており、大会両日とも夜間延長開館されます。初日の閉会から懇親会までの時間は、視覚芸術の生成パフォーマンスをご堪能いただけます。磯崎新氏設計、佐藤忠良氏による彫刻、白井晟一氏設計の美術館などが配された里山の自然豊かなキャンパスで過ごす、2023年の夏至を迎えた週末が、豊かなコミュニケーションの機会となりますよう、皆様のご参加をお待ち申し上げます。